
ブイゼルの旅～輝く記憶～

ブイゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイゼルの旅〜輝く記憶〜

【Nコード】

N9991U

【作者名】

バイゼル

【あらすじ】

チーム稲妻、バイゼルの過去による、ギャグで、シリアスで、楽しい物語。

彼はゾロアと出会い、冒険が始まる…。

様々な困難を乗り越え、ジムバッジ制覇を目指す彼の旅。

彼の7年間による成長を描いた物語が、今、始まる。

プロローグ

「…ブイゼルーー!!」

彼は、仲間をかばい、死んだ。

仲間は悲しんだ。

しかし、その彼 ブイゼルは、仲間をかばって死ねたことを誇りに思いながら死んだのであった。

もちろん仲間は嘆き悲しんだが、ブイゼルが仲間であっていたことを、誇りに思っている。

幸せ者のブイゼルは、隕石の力を吸収してしまって、水を従えろというすごい力を手に入れた。

しかし、それはかえって彼を苦しめてしまう。

暴走をすれば、自分の意識をも失い、すべてを破壊する力となってしまう。

そんな彼が歩んできた、冒険の数々を、今、ここで…。

第一話 かけがえのない出会い

「ふう・・・準備できた」

全ては七年前。

今、旅立とうとしているのは、ブイゼルだ。

「よし、行こう」

そういつてドアを押す。

「行つてきまーす!!」

「あ、行つてらっしゃい!!」

彼は幼き日に父を亡くしているので、母が送った。

妹も静かに見送っていた。

「地図地図…」

道端でリュックの中から地図を探すブイゼル。

実は少々心配症で、若干方向音痴なのだ。

彼はデリカシーというものがなく、恋愛に関する関心は0%だ。

しかし、頭は良く、運動神経にも優れていたりする。

「ん？」

草むららがさがさと動いていた。

「誰かいるのかな…」

そーっと草むらに近づく。

「あー!!」

そこにいたポケモン　ゾロア。

ぎょつとした顔で、ブイゼルを見つめ、こっぴつた。

「な…ななな…なんか用!？」

ブイゼルは、噛みすぎだなあと思いながらも、

「…君さ…」

「あ!？」

「僕の…仲間にならない!？」

「ええー!？」

突然言われたら当然驚く。

「いやだってなんか不安でさ…」

「つつたく…なんで俺が…」

「ゾロアくん、お願いだよぉー」

「キモっ」

そういいながらも一悶置き、

「…いいぜ、突っ込み買いがありそうだし、いいと思う」

「ほんと!？」

それが、彼との出会い。

ブイゼルは、いきなりできた仲間であるゾロアのことが大好きになった。

「よろしくゾロアー!!」

「おう…お前のことはなんていえばいい?」

「…ブイゼルでいいよ」

「そっか。よろしくブイゼル」

「うん」

二人の冒険は始まった。

「ゾロア、僕ね、すごく変な力を持つてるの、見てて」

「なんだそりゃ」

ブイゼルはゾロアから離れ、

「よっ！！」

指の先で、奇妙な白い球を作り出した。

そしてそれを地面に落とし、水がすごい轟音を立ててはじけた。

「……」

呆然と見ているゾロア。

「これ、水の波導じゃないんだよ……なんでだっけ、隕石かなんかにぶつかって……」

「……お前も……そうなのか？」

「なに？まさか……」

「俺は、なんでか知らないけど炎を操る力を持つてて……」

「悪タイプが？」

「そう、それがわかんないんだ。見てろ」

ゾロアは、口から何やら白い球を作り出し、地面に落とした。

すると、めらめらと炎が燃えた。

しかしそれは草に点火してしまい、大慌てでブイゼルが消火した。

「危なかったあ…」

「役に立たねえ力を持ちちまったんだよ俺は」

「いつかは役に立つ日が来るさ」

「そうか？」

「きつと来るよその日が…」

ブイゼルは、同じような境遇の仲間に会って、うれしかったが悲しかった。

僕と同じように苦しんでいる…。

そして、ブイゼルは足をまた動かし、先へ行く。

ゾロアとともに。

第二話 鋼鉄の島

「最初の町は、海にあるんだって」

「海！？俺無理だよ！！」

「えつとね…アイアイ・アイランド」

「言えてないけど？」

「あ…アイ……」

「アイアン？」

「そうそれ。アイア…ム？」

「なにそれ。アイアンだって」

「アイアヌアイランド！！」

「どんだけ滑舌悪いの！？」

「あはは…」

「アイアンだって！！」

「アイア…ん！！」

「そうそれ！！いよっし、行こうアイアヌアイランド！！」

「噛んでんじゃんゾロアー!!」

アイアンアイランド。

しかし、ここはもはや町がなく、すべてが鉄となり、さらにさびている。

今や廃墟となってしまった島だが、まだ資源が生きており、発掘されるため、まだ繁栄している。

町ではなく一本の巨大な鉄の船の中にいろいろとあり、ポケモンが住んでいたりもする。

しかし、その船 クインテット・クイーン号は、かつて沈んだ船であった。

ブイゼルたちが町についたところ、もう一つの影が動き出したのであった。

「ここをわがグループの本拠地にしようじゃないか」

「は……」

「この世界的に有名なダイヤモンド・ファクトリーの」

「……それは……いい考えですね」

「そしてこの町を占領し、わがグループのものとしよう」

「……はい」

先ほどからずっと暗い応答をしているのは、一匹のエモンガ。

実は、このポケモンがたどってきた壮絶な過去がブイゼルとかかわるのだ。

「暗いぞエモンガ」

「すみません」

「まあいずれにせよ…ここは私のものになるのだがな」

つぶやき、笑みを見せる謎のポケモン。

エモンガは、従うことしかできないのであった…。

「船の中に町があるって面白いね!」

「面白いな」

「…まあいいや、とにかく買っただけ買っていていいよ。ジムに挑戦するのはそのあとだ」

「二匹じゃ無理だよ」

「あはは…え? そうなの!」

「もう一匹仲間を入れないと」

「ガン…」

ショックを受けるブイゼル。

「…何あれ!」

たまたま見てしまったその先にあったものとは!?

第三話 ダイヤモンドファクトリーという名の犯罪組織

「…なんだあれ!？」

ブイゼルが見たもの。

それは、大きなポケモン ミュウツーの後ろについて回っているエモンガ。

黄色い模様が目立つ。

しかし、どこか悲しげで、明らかに無理矢理したかわさせられているといった感じだ。

「…なんか悲しそうなやつだな」

「無理に後ろにつかされたんでしょ」

「そうかもな」

そして、クインテット・クイーン号の中で買い物。

しかし…。

店がだいたいしまっていた。

「なんで?」

「わかんないけど…これは明らかにさっきのやつの子じゃない? ぽら、

いたじゃんミユウツー」

「そだね」

そして、歩いていると、ところどころ凍っていたりもした。

そういったところは、ゾロアが溶かした。

「ほら、役に立ってるよ」

「知るかよ」

さっきの氷。

実は、前回出てきたダイヤモンドファクトリーがかかっている。

・・・

実は、工場のような名前なのだが大きな犯罪組織なのだ。

そのため、人を殺したり、町を閉鎖させるために動く悪の組織である。

また、泥棒として働き、先ほどのミュウツーにささげたりするのだ。

そんな会社がなぜこの世に存在するのか。

その理由は、後々、あのエモンガによって暴かれることとなる。

だってあのエモンガは、囚われの身であり、ダイヤモンドファクトリーとは何の関わりもないから。

「ブイゼル、そろそろ飯にしようぜ…っっていうか何日ココにいる気だよ、早く見つけようぜ仲間」

「…仕方ないさ、はいりんご」

「どうも」

果たしてブイゼルは、仲間を見つけジムに挑戦できるのか？

第四話 仲間探しに立候補したのは…？

「めんどくさいなああのオヤジは」

エモンガが一人、クインテット・クイーン号をさまよっていた。

ミュウツーと別行動しているらしい。

「…なんか面白いことないかしら」

ちなみにこのエモンガは女の子です。

「…ん？」

たまたま彼女が見かけたのは…。

「仲間を探さないと、いつまでもジムに行けないぜ」

「わかってるよー！今から探そうー！」

「…どうやって？」

「もちろん、呼び込みでー！」

「…まじか」

「クインテ…テッテ、クイーン号でー！」

「言えてねーし…」

そういうわけで、クインテット・クイーン号で呼び込みを開始した
ブイゼルとゾロア。

「誰かー！！僕らと一緒に冒険しませんかー！！」

「お前あほかー！！」

ゾロアがいい感じで突っ込んでいく。

「なんか横に化け狐いるけど気にしないでくださいー!!」

「お前どいう呼び込みしてんだー!!」

「こんなアホコントしてるように見える僕らですけど気にせずにごめんなさい」

「ねえ!!お前何言ってるの!?!お前があほだよ!!」

そして振出しに戻る。

そこに通りかかったエモンガ。

「…なんだありや。もつとまじめにしなさいよアホコント」

でも、エモンガはその前を横切ることができなかった。

どうしても、あの二人が気になって。

「…あのー…」

近づいて、口を開いたエモンガ。

「なんでしょっ!?!」

「…もつとまじめにやりなさいよコントを!!」

「…はあ…」

「お笑いはそんなものじゃないわ!!」

「…あ！…もしかしてあなたは…」

「…ばれちゃったかあ…」

「ミ…ミュウツーの」

「そうよ、あのエモンガよ」

「なんでいつもミュウツーの後ろに？」

「世界を支配しようとしているの」

「…まじですか！？」

「私は奴隷のようなもので、人質としてミュウツーのもとにいるけど…」

「本当はいやでしょ？」

「ええ。私は都会で生まれたの。でも、町がアイツにやられて…」

「…許せないな」

「じゃあ僕らの仲間にならない？」

「なりたいわ」

「ミュウツーをさ、一緒に退治しよう！…」

「そうね」

「まあそういうわけでよろしく…あ、でもまずはミユウツィを倒すのが先か」

そこでブイゼルの頭脳が働いた。

「…いやかもしれないけど、『裏切り作戦』というのはどう？」

「全っぜん。苦にもならないわ」

「わかった？あのね、こうするの…」

果たして、ブイゼルの考えたアイデア、そしてミュウツァーを倒す方法は！？

第五話 封印大作ソン

「今から作戦説明するよ」

「おう」

「あのね、僕とゾロアはそれぞれ水と炎を操ることが」

「ストップ」

エモンガがストップをかけた。

「あの……実は私も電気操れるんです」

「ええー!?!」

「そんなわけで、作戦に入れてください」

「はいはい」

「で？続きは？」

「まず僕が水を従えて、水で球体を作り出してミュウツーを窒息させるでしょ？そして固定。そこにエモンガちゃんが電気を従えて感電させるでしょ？んで、ゾロアが変なこと言っつてミュウツーを動揺させるじゃん？そのあと、僕がとどめに冷凍パンチを使って水の球体をこおらせる。そして、この封印用の石に封印して終わり」

「んなもん売ってんのかよ!?!」

「…売ってるよ」

「ていうかなんだ俺のポジション！変なこと言っつてなんだ！？」

「お前猫？それとも宇宙人？じゃなかったらアホ？とかいうの」

「…Aかつこよくねーし…っかそもそも従える力関係ないし」

「ま、頑張れ」

「お前が決めたんだろうが…！」

「私も異議あります」

「はいなんでしょう？」

「なんでエモンガちゃんなの！！ちゃん要らない！！」

「じゃあなんていえばいいのさ」

「普通にエモンガでいいわ」

「わかった。じゃあエモンガ、お前はさらに大事な役割があるんだ…」

いよいよ作戦実行。

「俺たちはなんでアフロ持ってたんだ？」

「知らないよ、売ってたからノリで」

「おいおい」

「マジかお前!!」

「あ、ほらエモンが行っておいで!!」

「うん」

ミュウツーのもとへ向かっていくエモンガ。

「すみませんミュウツー様、はぐれちゃいました」

「別にかまわんが」

「いまだ、いけエモンガあ!!」

「…あんたなんてサイッテよ」

「ああああ!?!」

キレたそのとたん!!

「今よブイゼル!!行つて!!」

「うん!!水よ、僕に力を貸してください!!」

「間抜けな呪文だ」

「そんなこと言わずに」

エモンガはゾロアの方へ。

「らあああああああ！！！」

思いつきり水をミュウツーにかぶせ、手で操り、丸く球体を作り出した。

「ぶご！？」

「いっけーエモンガ！！」

「電気よ…私に力を！！」

エモンガは全身に電気をまとい、一気に放出した。

そしてそれによってミュウツーは感電。

「……！！！」

「ケっ、お前なんてあほだ」

ゾロアが毒舌を吐く。

「とどめだ！！冷凍パンチ！！」

ブイゼルの腕には冷気が漂い、そしてそれをそのまま水の球にぶつけた。

そして、球が凍るまで…。

ずっと…。

そして、てっぺんのとっぺんが凍った瞬間…。

ゾロアが前に出て、石に封印した。

「よっしゃー!!」

「これで正式な仲間だな!! よろしくなエモンガ!!」

「ええ!!」

にこにこ笑顔で答えるエモンガ。

これまで支配されてきたので、その苦しみから解放されたのだ。

「ありがとう、ブイゼル、ゾロア!!」

彼女は、きつと彼らに出会って初めて笑顔を見せたかもしれない…。

「ふあゝ…じゃ、行くか」

「食料も調達したし」

そんなわけで、町を出ようと思いました。

「…あ！…ジム…！」

アイアンアイランドのアイアンジム。

しかし、閉まっていた。

「あれ？ジムに挑戦しに来たの？今ジムリーダーさんは旅に出てますけど」

通りすがりのベロリンガに教えられた。

「…ええゝ…！？」

「ほかのジムからめぐって、それからこの町に来るといいよ」

「ありがとうございました」

「…なんだよ閉まってるんじゃないか。仕方ないね、次の町…。ニー
ドルシティへ行くぞ」

「うん…！」

こうして一行はニードルシティへ向かった。

第六話 大爆発を起こし…。

「ニードルシティまで結構距離あんな」

「ええ〜！？じゃあしりとりしようよ」

ブイゼルが提案する。

『ええなんで！？』

エモンガとゾロアは拒否する。

「やってよ」

ブイゼルが突然キレた。

意外にも怖いのだ、こいつの怒り顔。

「…分かったよ。しりとりだからりからか。じゃあ行くぜ、リングマ」

「マンムー」

「ムウマージ」

「ジュプトル」

「ルージュラ」

「ら・・・ラルトス!!」

「スバメ」

「メゲロコ」

「コダツク」

「クチート」

「止めようよこのしりと」

「リ...え...?もう終わり?」

「もうやめようよ、グダグダしすぎよ」

「はいはい...チッ、もうちょっとやりたかったのになー」

ブイゼルが口をとがらせ文句を言う。

「お前は子供か!!」

ゾロアが突っ込んだその時...

「...げほっ...!!げほげほ...!!」

突然ブイゼルが咳込んだ。

ゾロアは驚き、エモンガは後ろに下がった。

「げほ…っ…」

そしてブイゼルの顔は徐々に赤くなっていき、ぶっ倒れた!!

「…ブイゼル! しっかりしろ!!」

「…熱じゃないわね、いきなり倒れるなんておかしいわ…」

そして、倒れてしまったブイゼルをせめて日陰に持っていこうとした。

「…はあっ…はあっ…」

しばらく状態をみていたゾロア。

しかし、ブイゼルの体には異常が…。

「…寝たな」

「え？でもどうするの？アイアンアイランドからだいぶ離れてきたから、もう病院とかないわよ」

「そうだな…どうしよつか…」

その瞬間だった。

バイゼルの体には徐々に光が…。

「…ん？」

ゾロアが振り返る。

エモンガもその方向を見た。

バイゼルの体は、光っていた。

そして宙に浮き、突然光の玉がバイゼルの周りにできて、そしてバイゼルの周りに巨大な球を作り出す。

苦しむバイゼル。

そして、光の周りにはリングが現れ…。

回転を始め…。

やがてそれは、大暴走へと導く。

リングは超高速で回転する。

「…なんだこれ…!？」

「ブイゼルの体内に有り余ってた力が爆発したのかしら…」

「そんなことより止めたいけどでも俺は所詮炎を従える力だし、水にやあ叶わないんだよな…」

そうしている間に暴走は拡大していく。

やがて森を破壊するほどの大勢力となる。

「やべえぞ…!!早く留めないと…!!つかお前電気従えるんだろ?やれ!!」

「…分かったわ」

エモンガは光の玉に向けて電気を従え、球を縮めた。

「おお…」

ゾロアは黙ってその様子を見ていた。

そして光の玉が消え、ブイゼルが落ちた。

「…こりや重症だな」

「私のせいじゃないんだから…」

「まあそうだけでも。」

そして、ブイゼルが目を覚ますのをまつた…。

「…あれ？何してたんだっけ…しりとりの？」

「ちげーよ、お前いきなり倒れたんだよ」

「え？覚えてないけど…」

「お前なあ、看病したのにその言い草ねーだろ」

「え？だって本当に覚えてん（殴り」

「いい加減にしろー！！」

「待つてゾロア、ブイゼル本当に覚えてないわよ！！」

「は？」

「……もういいわよ……」

エモンガはあきれた。

ブイゼルは訳が分からなかった。

ゾロアはただカチンカチンにキレていたとき。

ニードルシティまで、
あとわずかか!!

第七話 ニードルシティ到着！！VSドライトス！！

「…フォー…ここがニードルシティかあ…」

「なんなんだフォーて」

針葉樹がたくさん並び、その針葉樹の根っこにドアが付いており、そこが家なのだ。

大きなスギの木。

そして、ツリーハウスもたくさん。

「楽しそうな町だな…」

「ジム戦ジム戦！！」

ゾロアが思わず、遊ぼうと走り出すブイゼルを止めた。

「ジム戦忘れんじゃない！！」

「あ。」

「あ、じゃねーよ！！行くぞジム！！」

「終わったら遊ぶよ？」

「勝手にしろい！！」

とつぶやいて、ジムへ。

「ここがニードルジムか！」

「広いなあ……」

「相手は草タイプでしょ？」

「結構不利でしょ……でも僕には冷凍パンチがあるもんね!!」

「おお……あのミュウツーをも閉じ込めたスーパーパンチ!!」

「とにかく中に入ろう!!」

中は普通にバトルフィールド。

「すごいなあ……」

岩がごろごろとしている。

少し葉っぱが生えていた。

「ジムリーダーさんいますか？」

「いるけど何か？」

出てきたのはフシギバナ。

「ジムリーダーさんですか？」

「そうだよ。ジム戦かい？」

「はい!」

「オーいい返事で。じゃあちょっと待ってて、最初の相手呼んでくるから」

「はい」

しばらくして、大柄なドダイトスが入ってきた。

「どうも、一戦目担当のドダイトスです。よろしくお願いします」

その大柄な体でお辞儀された。

「…いえ、こちらこそ!」

そして、ブイゼルたちは話し合いを始めた。

「どうするよ…誰が先に行くの」

「僕が行く」

ブイゼルが言った。

「え? ああ、でもドダイトスは地面・草だから…確かに氷技はいけるね」

「じゃあ行くね!」

ブイゼルがバトルフィールドに立つ。

「じゃあ一戦目!! ドダイトス対ブイゼルのバトル…開始!! 先攻はチャレンジャーからです!!」

「アクアジェット!!」

ブイゼルは先制で素早さの高いアクアジェットを放ち、ドダイトスに大接近!!

「…おお!! 速いなあいつ」

「確かに素早いブイゼルはドダイトスのあの巨体には有利…でも、相性的には不利よ」

「…あいつなら大丈夫さ！！いつけーブイゼル！！」

ブイゼルは先手を取ってドダイトスに突っ込み、まずは直撃！！

結構ドダイトスにダメージが…。

「…ん？なあエモンガ、よく考えたらさ、地面って水に弱いよな？」

「そうね」

「だから、相性的には有利な水タイプの技も、タイプ2の地面タイプで効果抜群じゃなくなってるってことか？」

「そういうことよ…でも、ドダイトスが放つ技は確実に草タイプの技。タイプ2がないブイゼルにとっては結構きついはずよ」

「じゃあこっちも技行きますよ。ハードプラント！！」

「そらみる、強い技で来たじゃねーか！！」

「いや、あたしが言ったんだけどその意見」

ブイゼルは持ち味の素早さで空中へジャンプ！！

ハードプラントを見事にかわした。

「おお……」

「カウンターシールド水鉄砲!!」

地面に着地するや否や、回転を始めた。

「あまごい!!」

さらに雨を降らす。

「雨何て降らしてどうすんだ?」

ゾロアが身を乗り出しながら言った。

「たぶん、作戦があるんじゃないかしら」

「ふん……あ!!分かった!!」

「え?」

「あいつの特性、すいすいだ!!」

「…雨が降ると素早さ2倍。」

「見る、スピンの回転が速くなってる!!」

ゾロアが気が付く。

バイゼルの回転のスピードが次第に速くなり、水鉄砲がかなり美しく舞っている。

そして、素早くなるために水鉄砲のスピードも上がり、攻撃力も増加している！！

「スゲーなあいつ、頭いいな」

ゾロアが言った。

「…ソーラービームは出せやしねえ！！雨雲で隠れてやがる」

「なかなかね」

「とどめだ、冷凍パンチ！！」

バイゼルが技を放った…。

その時！！

「ヤドリギのタネー！！」

ドダイトスがその前にバイゼルに種を植え付けた。

すると、ツルがどんどん伸び、バイゼルの体の動きを封じてしまった！！

「…！！」

さらに、バイゼルの体力を奪っていく！！

「さっきの体勢がうそのようだ…！！」

ブイゼルはドダイトスに勝てるのか？

そして注目の2戦目は！？

第七話 ニードルシティ到着!!VSドライトス!!(後書き)

続きます。

第八話 やどりぎ対ブイゼル!!そして二戦目!!

「うつ…!!」

やどりぎがブイゼルの体力を奪う!!

「このままじゃまずい!!」

「一気に展開が変わったわね」

「まずいつて!!」

「そうね…責めて、ブイゼルが回復技か何かを覚えていれば、体力のマイナスはあんまりないけど…」

「無理だろ…」

「ええ。この勝負、結構不利になってるわ」

「見りゃわかるけど!!でも…」

「あれだけ張り切つといて、負けたら悔しいわよ」

その時!

「…そうだ…!!」

ブイゼルの頭には、この厄介なやどりぎを消す方法を考えた!!

「冷凍パンチ!!」

その場から動かなかった。

でも、自分の腹に冷凍パンチを…!

やどりぎは落ちた。

「何やって…」

「確かに草はブイゼルにとっては不利。でも凍り技なら草にも有効!!だからそれを狙ったのね!!」

「お前さつきからカリスマみたいだぞ」

「気にしないでよ!!」

こうしてブイゼルは自分にもダメージを負ったものの、まっすぐにドダイトスへ向かい…。

「冷凍パンチMAX!!」

渾身の一撃。

ドダイトスの腹に直撃し、ドダイトスは目を回して倒れた。

「勝者、フレンドシティブイゼル!!」

「よっしゃー!!」

「お前頭良すぎねえか!!?」

「あはは…ありがとう。でも疲れたよ…」

「自分に冷凍パンチするなんてびっくりだ!!」

「次はだれが行くの?」

「…じゃああたしが」

「エモンガ?じゃあ頑張ってね!!」

「うん!!」

飛行タイプは草タイプへの攻撃が効果抜群。

期待大の相手だ!!

二回戦開幕!!

「じゃあこっちはジユカインで行きますね」

「おうよ！！」

ジユカインが威勢のいい、まるで魚屋のオツチャンみたいな返事をした。

「ごめん、田舎出身なんだ彼は」

「そうなんですか！？」

「だから、その竹藪の中育ってきた肉体はきつと手強いよ」

「知ってますよね彼の实力！？」

「知ってるけどあえて言わない」

「じゃあさっそくスタートです！！エモンガ選手対ジユカイン選手
！！」

「よろしくなあお嬢ちゃん」

「そう言う呼ばれ方は慣れてません」

「先攻はそつちからな」

エモンガは空へ浮かんだ。

「なるほどな、飛行タイプの攻撃で俺を攻めようってか。ふうん
…」

「行きますよ、エアスラッシュ!!」

「おっとお…」

へらへらしながらジユカイン避けたー!!

「へらへらすんなあっ!! お前あほかあああああ!!」

「ゾロア!! 抑えて抑えて」

しばらくそんな感じでバトルが続く。

「やめてー!!」

「この省略要らねー!!」

「あ、僕突っ込んだじゃった!!」

「今から突っ込みの醍醐味教えてやろっか? お前ボケばかりじゃ
ん」

「…なんでえ…???」

さて、ブイゼルの突込み特訓、そして注目の一戦目！！

次回に続く（殴

「ダメーっ、ダメーっ、なんでーっ！！」

第八話 やどりぎ対フイゼル!!そして二戦目!!(後書き)

というわけで結局終わりました。

次回に続きます!!

第九話 エモンガ対ジユカイン！！決着、二回戦！！

「エアスラッシュー！」

「らっくちんらっくちん」

「なめてるにもほどがあるわよ…」

そこまで言いかけて、エモンガの頭の中にアイデアが…。

（…そっか、素早さに勝つには素早さ、回避率を下げれば有効ね…でも、そんな技ないなあ…でも、逆に私の素早さを上げたら、ジユカインのスピードに追い付ける…？）

そこまで来て、エモンガの考えはまとまった。

「高速移動！！」

エモンガは自分のスピードを上げようとしているのだ！！

「いっけーエモンガあー！」

「ファイトーエモンガあああああー！！」

二匹の歓声も大きくなる。

「負けんなあーっ！！」

（負けないわよ田舎もんなんかに！！）

素早さを上げまくったエモンガは、ジュカインに向かっていき…。

「超光速エアスラッシュ！！」

そしてこの一撃はジュカインに一撃、飛行に弱い草タイプのジュカインは敗れ、エモンガの大勝利！！

「やったー！！」

「おめでとー！！」

「イエイ」

「…チツ、負けたぜ」

「まあまあ、次は僕の出番だ」

フシギバナが前に出る。

「じゃ、行きますか」

ゾロアも前に出た。

「ねえゾロア、突込み特訓は？」

「後でだ」

「じゃあこれより、チャレンジャーゾロア対ジムリーダーフシギバナによる一対一ラストバトル開始！！」

「おおーっ!!」

「先攻はチャレンジャーからな」

「いいぜ…ねこだまし」

ゾロアはいきなりフシギバナの不意を衝こうと接近!!

「…甘いねえ…」

「……ああ、分かってる!!」

ゾロアは技を交わされたものの、まじめに答える。

「すごいねゾロア、やっぱり強いね」

「…すごいけど、フシギバナは手強そうだね」

「大丈夫、ゾロアだもん」

「だいいけど」

そのころ、ジムの外。

「…はい、もちろん。奴は必ずや連行します」

ジムの外に、ユキワラシとゴローンが。

そう、これはチーム稲妻編のあのユキメノコとゴローニヤだ。

「…任務遂行よ」

「おう」

ジムと、外で巻き起こる事件とは…? ?。

「ゾロア、頑張れーっ!!」

ブイゼルの声援が聞こえる。

「負けるわけないじゃんかよ!!」

「ぶちかませ、炎!!」

「おうよ!!」

次回に続く!!

第九話 エモンガ対ジュカイン!! 決着、二回戦!! (後書き)

空白多いわ!

第十話 決着ジムバトル!!

「ゾロア頑張れ　!!」

「わかったから静かにしろ!!」

そしてゾロアは…。

「奥義：火炎リボン!!」

「なにそれカッコイ―!!」

ゾロアの体から帯のような炎が巻き起こる!

そしてそのままフシギバナへ…。

フシギバナはあつけにとられ、このリボンに巻きつかれてしまった
!!

「…なんだこれは…!?!」

「炎を操る力…それが俺には備わってます。だからそれをフルに生
かした技を考えたんです!」

「…賢いなあ」

そしてリボンでフシギバナを締め付ける。

締め付けられると同時に炎が体力を削る!!

「…私の完敗だな」

フシギバナはこのユニークな技の前に倒れかけた。

でも…。

「…あ」

フシギバナは守るを使って炎の帯をはじめた！！

「なっ…」

「すごい技だけど…体力も消費するみたいだね。ジムリーダーとして負けちゃいけないんだよね」

「…ふん、負けはしませんよ」

そしてゾロアはもう一つの技を考えていた。

「…奥義…フェニックスファイヤー！」

「…かつこいい名前ですけど…」

「カツコいー！！」

そして炎がゾロアの口から放出された…。

しかしその炎が空中に舞い、勝手に動いた！！

「……!？」

そしてそのまま……………。

フシギバナへと突っ込み…。

煙が上がった。

煙が失せた。

フシギバナは倒れていた…。

「勝者、チャレンジャー!!」

「やったずえ!」

「舌がもつれてる」

「よーゆ!!」

「どこが」

「…お疲れ…はい、ジムバッジ!」

「ありがとうございます!」

ジムバッジをさっそくひとつゲット!!

この勢いでまた進むのか!?

ジムを出た。

その瞬間…三匹が一気に襲われる！？

次話に続く！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9991u/>

ブイゼルの旅～輝く記憶～

2011年11月13日07時08分発行